

静中・静高 関東同窓会 会報

静中・静高関東同窓会
会報 第41号
平成8年6月20日発行
編集人 上杉重吉

山川の兄あに哥い

75期 村松友視

山川静夫さんといえば全国区の人気者、何も駿河ビーブルとして登場させずともといった向きもありだろうが、どうしてどうしてこの人は極め付けの駿河ビーブルなのだ。浅間神社の宮司を父にもつという部分も極め付けの要素のひとつだが、それより何より山川さんは、静岡大好き人間なのである。

山川さんは、私にとっては中学と高校の先輩であり、NHKの名アナぶりや文章家としての才能には、そのことと別に尊敬の念を抱いている人だ。こんなことを書いていると堅苦しい間柄と思われるが、山川さんは私を舎弟あにいとしてかわいがってくれる兄哥だ。

出会いは駿河とは関わりなく、東京は銀座の鮎屋のカウンターでのことだった。隣り合わせて話をするうち、「何だねアンタも静岡かね」てなことになり、たちまち親しみを感じてしまった。その鮎屋が縁で北陸への旅を一緒にしたこともあったが、その鮎屋へ足を向けなくなったタイミングも理由もほぼ同じという、まことに気脈の通じる先輩後輩でございます。

紅白歌合戦で山川さんが司会をやっているとき、ちょうど直木賞をもらったばかりの私が審査員に選ばれた。舞台袖の何だか暗いところですれちがうと、「なつかしい歌手はだれ?」、山川さんが私にそっと囁いた。「黛ジュン」、

私は意味も分らずに答えたが、それは数ある審査員の中で司会の山川さんが私に質問のマイクを向けてくれるための囁きだった。そんな親しいや兄哥心も知らず、本番で山川さんにマイクを向けられ、

「心に残っている歌手はだれですか?」と言われた私は、「そうですね、水原弘ですね」なんぞと口走っていた。それでも兄哥少しも騒がず「女性の方は?」と言ってくれたので、さすがの私も舞台袖の囁きを思い出し、「黛ジュンです」と答えた。すると山川さんはなるほどというふうにしてくれ、「時代屋の女房のイメージは黛ジュンだそうでございます」とコメントした。せっかく目立たせてやろうと思ったのにと、そのとき山川さんはあきれたのかもしれないが、考えてみれば私は自分と司会者の会話を結果として長びかせてしまったわけで、きわめて図々しい紅白歌合戦出演となったの

友人を誘って 総会へ集まろう!

第二十二回関東同窓会総会を左記の通り開催いたします。同期の友人などと誘い合って、ぜひご出席ください。出欠のご返事は同封のがきで、至急お願いいたします。

平成八年度 関東同窓会総会・懇親会

日時・七月十二日(金) 午後六時三十分より

場所・東京都千代田区神田駿河台三十一

新日本証券 地下一階食堂

電話〇三三二一九三三三

会費・五千元(ただし在学者は無料)

年会費の三千元は当日受付けもいたしますが、この会報に同封の払込用紙によりご納入をお願い申し上げます。

議題・平成七年度事業報告、会計報告

平成八年度事業計画、予算 その他

引き続き、懇親会

(例年通り郷土色を盛り込む計画を立てております。)

しめきり:

七月三日

同封はがきに50円切手を貼付して、出欠を至急ご連絡ください。



だった。

もつとも、感謝することばかりもないのが先輩で、日本平ホテルのときはエライ目にあった。ロビーでタバコを喫っているとカメラマンを従えた山川さんがあらわれ、ちようどいいからちよっとインタビューさせてくれと言った。訳も分からずにうなずくと、タバコを喫う理由を聞かれた。そこで、何ということもない答えをする。山川さんは、「ありがたい、いずれまたね……」通り雨みたいに行き去って行った。

あとで山川さんから聞いたところによると、あれは喫煙に対して警告を発するような主旨の番組で、私が何かを答えたあと、山川さんもおもむろにカメラに向い、「そう言っ理由をつけてタバコを喫いつづけ、人は着実に肺ガンへのコースを辿ってゆくのです。」とコメントしたというのだ。先輩そりゃあないだよ……本当か嘘か



分らぬ山川さんの話に舌打ちをし、山川さんと私はその話を肴に酒を酌み交したものだ。

NHKを辞めて、山川さんはかつて忙しかったようだ。アナウンサー時代に貯めた知識や体験の財産が、いま満開しつつあるといった趣だ。それでも山川さんは夏の静高の野球はかならず予選から見ることをつづけている。昨年は、草薙球場でバツタリ山川さんと会い、何だかやけにうれしかった。山川さんは山川さん

の同級生と、私は私の同級生と一緒に、こういう遭遇こそ賀沢というものだという気がした。それにしても「静高なんまーちつと強くなってくるといいんだけんね……」これが、夏になって山川さんと交わす会話のパターンとなった。そう言いながら、山川さんはせつせと静高の野球に通っている。いや、そればかりでなく足しげく静岡へ出かける山川さんとは、東京で会うより静岡で会うことの方が多。私がたまに静岡へやって来るとかならず会うのだから、山川の兄哥は駿河ビーブル以外の何者でもないであります。

●作家の村松友視氏は中央公論社で「婦人公論」「海」などの編集に携わり、昭和57年「時代屋の女房」で直木賞を受賞し、多数の著作あり、近作の『アブサン物語』もベストセラー。

村松氏は文協ニュース「とも」に「駿河ビーブル物語」を連載中です。その九回めに載った、この「山川の兄哥」を村松氏、ならびに発行所・静岡県社会人体育文化協会の佐野つとむ氏のご諒解を得て掲載させていただきました。ご好意に感謝申し上げます。

(写真提供：山川静夫氏)

Ⅱ 各期幹事一覧 Ⅱ

幹事が変更の場合は事務局までお知らせください。特に幹事未定の期(83・88・91・98・99・101)は至急選出してご連絡を！

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------------|---------|------------------|-----------------------|-------------|------------------|--------------|---------|--------------|------------------------|---------|---------|--------------|--------------|--------------|-------------|--------------------|--------------|-----------------------------|--------|--------------|--------|-------------|---------|---------|-------------|--------|--------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川圭治・雨宮明生 | 69…小林泰三 | 70…川端正良・関哲男・宮本達治 | 71…児玉文男・後藤弘枝・海野幸雄・篠原直 | 72…桜井亮介・深田均 | 73…杉山光・中西英一・山中博司 | 74…佐藤鐘司・藤原経史 | 75…後藤正義 | 76…酒井孝太郎・鈴木浩 | 77…加藤重信・野方重人・三浦位通・清水雅尚 | 78…鈴木藤男 | 79…上田尚亮 | 80…野崎幸彦・諸星勝保 | 81…鈴木素明・萩原英昭 | 82…杉本三郎・堀内淳司 | 83…神原明生・田辺哲 | 84…池田幸司・増井喜一郎・深津俊郎 | 85…成岡和美・井出慎吾 | 86…橋村芳一・平岩正史・薬科名雄・沢井良輔・石川嘉和 | 87…鳥巢修 | 88…荒井千明・小林一郎 | 89…清水篤 | 90…岡村幸彦・望月朗 | 91…松野敦子 | 92…新村昌弘 | 93…奥田規之・細沢優 | 94…藤森尚 | 95…船橋智 | 96…伊藤親高 | 97…相坂慎治 | 98…相坂慎治 | 99…相坂慎治 | 100…相坂慎治 | 101…相坂慎治 | 102…相坂慎治 | 103…相坂慎治 | 104…相坂慎治 | 105…相坂慎治 | 106…相坂慎治 | 107…相坂慎治 | 108…相坂慎治 | 109…相坂慎治 | 110…相坂慎治 |
|-------------------------|---------|------------------|-----------------------|-------------|------------------|--------------|---------|--------------|------------------------|---------|---------|--------------|--------------|--------------|-------------|--------------------|--------------|-----------------------------|--------|--------------|--------|-------------|---------|---------|-------------|--------|--------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|

同期会など

四三期

四月二十日(土)静岡の三笑亭で第九十八回目の四三会が月例屋敷会の三笑会(第百七十三回)を兼ねて開催されたので出席した。

静岡地区から六名、浜松より一名、関東から二名、関西より一名出席して、十名が集った。

当番幹事の見原三郎君よりクラスメートの報告、同窓会運営についての報告があり、特に年内に新名簿発行についての協力の申し出があった。また、平成十五年には母校創立百二十五周年大会が行われるので実行委員も決定した由である。

今回の四三会には全員に案内状が発送され回答を得たので会員の近況を知ることができた。静岡県内十四名、関東地区十四名、名古屋地区一名、関西地区二名、広島市一名で、合計三十二名である。

昭和の激動期を無事乗り越えた方々も平成に入ってから他界される級友も多くなり、昨年は六名今年になってから二名逝去されてしまった。現在療養中の方も約半

数で、残念ながら四三会の会合も往時の盛会も夢となってしまった。

開会にあたり物故者の冥福を祈って黙祷をし、柳沢保雄君の音頭で乾杯した。三笑亭の鋤焼も炭火



焔炉で炊かれており、味も上々で久しぶりに話題も弾んだ。

関東同窓会の行事の報告をして秋の江の島会のお誘いをした。

平山桂君より関西同窓会の報告があり、阪神大震災からの復興状況の報告があり、会員の宝塚市在住の塚本猛次君の自宅も修理完了して帰宅された由。同君も目下病中にて一日も早く快方へ向うよう祈る次第である。

次回の第九十九回の相談では静岡と東京の中間の熱海付近で開催することに決めたが、平成十年には第百回となり会員は米寿を迎えることになる。多数元気で出席できることを期待し、次回の月例三笑会を楽しみにして散会した。

散会後常磐通りより追手町へ出て、新たに県庁内に建てられた防災センターのある二十四階建の別館を望みながら、駿府公園再整備計画で四〇〇年前の姿に復元された二の丸東御門を見学した。

嶋田富治雄君より四三会に一句いただいた。

「春深し残り少なき集いかな」

(西沢純三)

写真右から高須彰、安池健次郎、竹村千幹、堀田利郎、河村亮、柳沢保雄、西沢純三、平山桂、磯谷幸一郎、見原三郎

五一期

われわれ五一期生は一年に二回のクラス会を東京と静岡で交互に開いている。平成7年の秋は十一月十七日に東京で開催した。会場はJR四谷駅前のスクワール麹町である。ここは四谷消防署のとなりで、消防署の管理する会館である。ここを選んだのは駅から近い

こと、エレベーターが利用できること、洋室で椅子に腰掛けられることなどの条件が気に入ったからである。

静岡から参加したのは、市原君、狩野君、牧野君、丸山君の四人でした。久しぶりの参加者は丸山君と玉越君と渡辺君で丸山君が乾杯の音頭をとった。出席会員からの近況報告では狩野君が映画を一月に六十本、一年間に四百本を見る(ビデオで)のを目標にしていることと、広瀬君がゴルフに毎週二回ゆき、ハーフ40を切ることを目標にしていることが元氣じるしとして印象に残った。

この歳になると身体のごとくに異状があるが、うまく付き合っているようだ。この会合に出てくる人は病氣持ちといっても日常生活にさほど不自由ない方で、外出も会食もできない人に比べればはるかに恵まれている。東京近辺の在住者はこの会を続けるつもりだ。

当日の出席者は、飯田鉄雄、市原英助、狩野安彦、佐伯正剛、高橋達郎、玉越俊一、田中賢一、永井五一郎、難波悦朗、林盛次、原崎郁平、広瀬毅、牧野三郎、丸山雅生、宮野守信、森弘、渡辺功、合計十七名でした。(原崎郁平)



五二期

平成七年度の総会兼忘年会は、十一月二十日(月)正午から、幹事松永圭司君の肝入りで、交通至便の神田学士会館にて開催されました。夜の会合は卒業との声に応え且つ皆の出席し易い時間帯を選定されたものです。

昼前から時雨を降る生憎の空模様となりましたが、逢う瀬を棄しむ岳南健児の意気軒昂。当日の出席諸兄は、岩本良雄・大草知久・太田逸夫・川島喜八郎・佐藤昌武・曾根信一・田中貞司・西野武朗・服部雅雄・広川聡・茂呂茂樹・松永圭司・新美弘の計十三名を数えました。

定刻、幹事開会を宣し、物故者に黙祷。乾杯の音頭を川島君の発声により唱和、一気に学生時代に還り、会はいつもの通り賑々しく盛り上がりしました。

平成七年は年初から阪神大震災、地下鉄サリンに続くオウム関連事件、夏季の列島猛暑と異状洪水、バブル崩壊等自然現象から社会事象、果ては人間文化の所産の行方まで不安を感じさせる出来事の連続でした。こうしたなか六月の中島屋ホテルでの静岡五二期会に出席した田中君から「クラスメー

トには格別の被害ない模様」との情報もたらされ、あらためて安堵の胸をなでおろしました。

ついで一月に急逝された岡利彦君(静岡組)の病状経過と告別式の模様、田中・岩本両君(静岡の会に出席)から交々述べられ、又関東五二期会の樽松恒右(平成六年五月)・遠藤康(同十月)両君逝去の様子を服部君から、ご家族のお話しを交えて報告され、各自他人事ならずとシンミリさせられる場面がありました。

特に会の常連として活躍された両君を亡くし一入の寂しさを感じます。この会の為静岡から出席の西野君が、校友会規則改正の文書を松永幹事に届けられると共に、来年度総会を大崩海岸中島屋旅館一泊旅行とすることが静岡側の意向として提出された。これに対し東京の常任幹事(関東五二期会)服部・広川両君が在京会員に図り、川野辺幹事まで回答することとしました。

最後に今後の会の運営方法について出席者の意見を集約した結果、従来の毎年幹事役交替で年一回開催という方式を改め、今後は毎月一回でも(例えば第〇旺日)会合を開いて情報をこまめに蒐集する必要がある。その為に、誰で

も余り費用をかけずに、気易く集まれる場所とする。当分の間、今回の名幹事松永君にご苦労をお願いするという事で一決しました。

出席の諸兄、口ではヤレ筋属疲労とか、部品損傷と申されながら健啖痛飲の上、破防法適用の可否にまで議論が及び、予定の三時間はまたたく間に過ぎ、再会を約して散会しました。今回種々の事情から欠席された諸兄、次回には是非元気なお顔を見せて下さい。又健康を害され病の床にある諸兄のご回復を心からお祈り致します。

(新美 弘)

五五期

長い間同期会世話人として貢献された山本礼司君の急逝後、これからの会の運営を如何にすべきかを協議しようということになり、大高愛司、久米収、黒田博司、杉山一与の四君の呼びかけで、四月二十五日静岡たちばな会館において五十五期の同期会が開催された。

当日は、桜が咲いたまま散ることでもできないような低温続きを一気に挽回する初夏のような陽気となった。定刻十二時の前から続々と詰めかけた出席者は二十八名(うち関東支部からは石神庸一、木村康宏、宗四朗、辻弘、戸塚正

五、中田吉信、法月重雄、日比光明の八名)。

冒頭、久米君が司会となり、今後の運営について次のような原案の提示があった。

まとめ役として、かつて母校の校長を勤めた吉川晴夫君にお願いするのがふさわしいと思う。その他に発起人の前記四名、および同窓会理事の飯田実君、関東支部幹事の法月重雄君、合せて六名が協力、応援するというものではどうかとの提案があり、満場一致可決となった。なお、出席者の中から

の提案として、①緊急連絡網の地区別ブロック制の設定とその世話役の選定。②会員の高齢化が進む中での具体的運営の検討。以上ふたつが投げかけられ、いずれも新幹事の間で実施の方向で取りまとめることになった。

議事はこれで終り、吉川君が挨拶に立って、「六名の幹事の采配により下働きをさせていただく。山本君のような行き届いた運営は難しいがよろしく協力の程を」と、この人らしい謙虚な発言があった。(したがって、今後五十五期会の事務所は、千四二〇静岡市上足洗二六二二八の吉川君方に置かれることになる。なお、電話は〇五四一二四五―九八五八)

次いで本日のゲストである諏訪卓三先生の挨拶があり、その中で長寿の秘訣は「一に歩くこと、二に勉強すること、三に酒を飲むこと」と何時も変らぬ飄々たる様子。偶々明日が先生八十六歳の誕生日とのこと。われわれよりひと廻り上でこのかくしやく振りには一同是非あやかりたいものとの声しきり。

宴に入ってめいめいの近況報告がはじまると、忘れかけていた幼な顔が浮んできて、殆どみんな病や故障のいくつかを抱えながらもそれとは見えぬ少年の顔になっている。昭和十五年、卒業の年に遭遇した静岡大火の跡片付け中、拾ったガマ蛙の像を諏訪先生授業の時の教壇に置いたイタズラ者は誰であったか―と既に何回かくり返された思い出話に、先生は「親が付けた名前より成人してから付けられたアタ名の方がより一層当っている。」と不快感どころか當時を懐kindでおられる面持ち。こんなエピソードも先生と五十五期を結ぶえにしといえるかも知れない。お開きはいつものように「岳南健児一千の―」となり、これからは原則として毎年一回は集まろうと約して、それぞれ帰路についた。(日比光明)

六〇期

六〇期クラス会は四月二〇日に焼津市浜当目の松風園で行った。

昨年は清水、今年は焼津が幹事ということで、片山勝彦が司会、昨年の幹事鈴木竜雄が乾杯、地元の大野喜市朗の挨拶で始まった。

全国から集まったのは五七名、関東からも五名（上杉重吉・笠間達男・川口光次・原田龍二・山本正三）が参加。約二六〇名の同級生の中で亡くなった人は五二名である。

われら昭和十五年入学者は、来年めでたく満年齢で古稀を迎える。勤労動員で学業は不充分だったが、予科練や軍関係学校に行った者でも戦死者がいなかったのが生存者の多い理由だが、欠席理由の中に病氣療養中が多かったのが私には気になった。

過半数の者はすでに退職し、悠々自適の境遇にある。五一年ぶりの再会で互いにその変貌に驚き、人生行路を語り合う人や、健康について情報交換する人もいたが、初恋のスッパ抜きなど話題の中心はやはり静中時代のことである。

名残は尽きぬ中に、才茂蒼英が次回は「静岡」が引き受けると挨拶し、今や恒例となった杉本武の

リードによる校歌、応援歌を合唱して解散した。（笠間達男）

六四期

平成八年一月十三日（土）十七時より、中央線中野駅近くの「ブリモペーラ」にて在京六四期生の新年会が催された。世話人代表の名波倉四郎君の挨拶があり、「気軽に出てこられる人が、好きな時間に来て、帰りたい時に帰る」こんな会合があっても良いのではと考え、同期の加藤満君のお店を借りての初会合となった次第。

参加者十六名、加藤君の奥さん手製の普通のレストランや料理屋では食べられない和洋の料理と、沢山の飲物。堅苦しさのないふんいきの中で、全員美少年時代に戻り、あっという間に四時間が過ぎ、「岳南健児」を斉唱して別れた。

各人の近況、人生観、闘病の事などを次に記す。

仲野実君、自転車競争が好きで、今までに二十台位乗りつぶしているが、現存しているのは四台、東京一箱根間は何回も走破している。「三ツ子の魂百まで」自転車を通じて人生百三十歳、丁度今が六十五歳の折り返し点なんだと思っている。呼吸とペダルを踏む足

のリズムが良ければこの年でも箱根を越えられる。

渡辺宏一君、友達の顔を見たいので出席した。昔中学に入った時は一年二組だった。卒業後静岡で商売に失敗し、東京へ出て来て、タクシー会社に入社して人生やり直しを始めた。その後個人タクシーに変更し、安全運転を心掛けたため、表彰も受け、老人や身体障害者の客を常連に持っている。七月七日の会合には出席出来ない。息子達が大変親孝行してくれるので嬉しい。

山下啓也君、静岡で一月四日新年会があったが十四人位の出席で淋しかった。「風のたより」国民学校連合会は市内三十二の小学校卒業生の協力を得て、徐々に会員を広げている。五月の講演で二枚の入場券を売りさばくのは大変、在京諸兄の協力をお願いしたい。

山本光夫君、厚木から駆けつけた。目下イベント会社を経営し、東京・名古屋・大阪・九州と飛び廻っている。健康保持のためサッカーをやりながら、徒然に俳句を少々たしなんでいる。

栗田行雄君、静岡を離れ今年で二十一年、調布で画材を商っている。好きだった絵画も毎年二科展に入選し、色々な雑誌に挿絵を書

いている。

神谷武男君、昨年末六十五歳で第二の勤めを退職した。相変わらず元気で目下ゴルフとテニスの練習に一生懸命打込んでいる。

永田進一君、昨年七月、妻と六十五歳の記念に軽井沢・飯綱・青木湖と旅をした。目下夫婦二人でんびり暮らしている。

杉本哲君、会社を設立してから三十一年、年金をもらったらその金全部で社員を連れて一杯飲みに行きたい。また早逝した中川利夫君の事を青森の恐山に行つて聞いてみたい。

渡辺素夫君、六四期の友人の中に大島君・野末君等、まだ名簿に記載されていない友がいるので調査して再会したい。

長谷川直和君、自分の人生観よりすると、人間何よりも身体の健康には気をつけること。

村上喜代二君、ワイフがタルメシアン犬の散歩を日課にしている。いつも同伴していて足腰には充分自信あり。

岩本吉雄世話人、七月七日の同期の会合も良い集いだとおもうが、新年会も又気楽なのは是非継続して行きたい。墨田区緑町三丁目の地域に密着して生活をエンジョイしている。特に亀戸天神のお

祭は、いつも心がウキウキし仕事に手がつかない。

名波倉四郎世話人、ここ二、三年例会を欠席し申し訳なし。一昨年は生れて始めて病気をして、健康が一番大事だと痛感した。この歳になり自分のためにもっと楽しんでほしいのではないかと思ひ、年末年始、バリ島へ家族と旅をした。今後自己の生活をエンジョイしながらボランティアもまた一生懸命やる覚悟だ。

武田英夫君、久しぶりに出席し、昔の仲間にあえた嬉しさで一杯。静中時代の事どもを色々と想い出しているが、若い女の子に囲まれて幸せ。

小生、家内と年末年始を山口・安芸の宮島で迎え、四月弘前・角館の桜と雪の八甲田・八幡平を見物、八月阿波踊、九月越中八尾の風の盆と郡上八幡踊を見物した。故郷静岡には心踊らすものが何もないことを歎く。（野沢正憲）

◎各期幹事皆さまのご協力に感謝申しあげます。今後も同期会の報告などとともに、最新の同期生名簿をお送りいただければ幸甚に存じます。（事務局）

49期 杉本 久敬

彼は元治元年元服をすませました。だが、動乱の時代に入っており、したので、異人館焼打ち、彰義隊の戦い、官軍との抗争などに明け

附属小学校では、余り成績も良くなかったので、名門静岡中学入學は無理と言われておりましたが、何とかすべりこませて頂いた時は、大変うれしくて有頂天になって大よろこびして、春のおせん

家が江尻町といって料亭「求友

剣道は、正課としてはじめまし
たが、放課後は道場に入りびたり

稽古をするようになりました。家には刀剣類が沢山ありましたので、幼時から剣道にあこがれていました。岡文雄先生は、『心正しからざれば、剣正しからず』と教えてくれました。割合早く武徳会の二段になって、先生のおともで警察とか、軍隊に稽古に行きました。先生の町道場盈進館にも入門し、夜は町の人達と稽古をいたしました。四年生になって、静高にあこがれ、家永敬三先生の塾にかよって、何とか文科丙類にすべりこみて

今は友人も少なくなり、静岡に

社員生活は、平凡に過し、現

あります。

こ下さい。

51期 田中 賢一

が、私は静岡市における甥の結婚式に出席した。甥は私の妹の子で、静岡の出身である。披露宴で

但が程よく廻った頃、新郎の友人数名が突然「岳南健児一千の……」と唱い出した。甥は東京の会社勤めだが、この連中が静岡の同級生だったかと初めて知った。私の後輩にあたる訳だ。

私に嬉しくなって大声を張り上げて合唱した。新郎の父親、即ち私の義弟森竹清は靜中で四年も先車の47期生である。彼も喜んで一緒に唱った。

「そこなり」までで若者達の歌声は止った。忘れたのかと思って私と森竹の二人は、至誠を色に表はせる唐紅の旗幟……と唱い進めながら、若者達がついてこない。在校中一番だけしか唱わなかったという。

戦前派の二人はうろ覚えだった。か酒の勢で……大現神天皇の威を四方に輝かせ、まで唱って聞かせた。

若い日、草薙の球場で野球に優

勝し校歌を高唱した感激、運動会

で幟を掲げ校歌を唱い、校庭を練り歩いた思い出、あの校歌が一番だ、だけで切り棄てられてしまったとは。三番にいう「龍爪山の木枯には。青葉が岡の夏の日……」などというあたりは、思い出の最たるものである。

「義勇奉公四つの文字 掲げて共に進むべし」と唱った「唐紅の旗幟」（校旗）はどうなってしまったのだろうか。日本民族から「義勇奉公」の精神が失われて既に久しい。

嘗ては「御国の柱礎となりし祖先の後継ぎて」と唱っていた。我々の同級生でも二十三名が今次大戦で戦死している。その人達の面影は、今でもありありと臉に浮かぶ。

戦後の後輩達よ、せめて校歌の一節でも、御国の柱、礎となつた先輩がいたということを思つてもらいたいものだ。

この駄文、前半は十数年前の出来事だが、後半は今も変らぬ私の心境であり、願望である。

◎原稿歓迎ノ 関東同窓会々員の
絆をより強くとの願いをこめて、
より充実した会報誌面になるよう
に、一層のお力添えをお願いいた
します。
(編集子)

(編集子)

静岡の万葉を歩く

(その十二)

51期 原崎 郁平

JR三島駅前の市立公園「秦寿園」の中の万葉の庭に次の万葉歌碑が建っている。

「冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど……」

額田王 (巻一一六)

昭和五十一年三月建碑 松田修書 (植物学者) 建立者 倉島延三

この歌は短歌でなくて長歌である。大意は「冬の間に……」

としていたが、春になって来ると鳴かななかった鳥も来て鳴いている。咲いていなかった花も咲いているが、山の木々が茂っているのに入って取ることも出来ず、草が深く茂っているのでも手にとりて見ることも出来ない。秋の木の葉を見る時は黄色く色づいたものを手に取って美しいと思いい、青いのはそのままにして嘆息する。そこが恨めしいが、私はなんといいっても秋の山が



優れていると思う」この歌の傍に、次の説明文がある。

「万葉集は日本の美しい自然を背景にして生まれた一大歌集で、日本民族の文化遺産として大切にされている。自然を形づくっているのは草や木といえるし、万葉人はその自然を愛し、草や木に寄せ、また花に寄せて、その心を自然に移しているのである。万葉の植物は日本民族がじかに日本の植物を知り、はじめてそれを明示したところに特色がある。万葉人がこれ

らの植物をどう観察し、人々の生活、文化、民族そして感情とどう結ばれていたかを万葉集が教えてくれる。これらの万葉の植物は、

古典の植物として私たちの心にいつまでもつながっていくことと思いい、また保存の意味において『万葉の森』建設の構想が打ち出され、数年の歳月の後完成した」

「秦寿園」は明治二十三年から小松宮彰仁親王の別邸として使用されてきた。その後李王家別邸、緒明太郎氏邸となったが、昭和二十七年より三島市が管理している。

この歌は静岡県とは直接関連性はないが、「秦寿園」全体が醸し出す四季の雰囲気がこの歌に似合っている。

転校生

53期 白鳥 峻

花散りこむ海ばかり見て転校生世々嗣ぎて山肌荒き茶を摘めり前途ありし日の傍線の書を曝らすたたまれて鯉は目玉となりけり青蜜柑熱っぽくエーゲの紺を語る向日葵の空の彼方の豪雨なり原爆忌わがはらわたに石育つ

(俳句誌「寒雷」「陸」同人)

「いじめ」の今昔

60期 笠間 達男

最近のいじめに関して、畏友の三枝純郎は手紙で「いじめられたらいじめ返せ、場合によったら刺し殺してもいいのだ」といつてきた。某女子大学で生徒指導の講義をしている私を「いじめ評論家」だとしての提言である。

彼は昨年私たちの卒業五〇周年の文集に、中学時代の五年間教師や同級生らにいじめ抜かれた体験を詳細につづってきてわれわれにショックを与えた。その中にはナイフを抱いて登校し、今度やられたら刺してやろうと思ったことなども述べられていた。

旧制静岡高から名大医学部にすすみ、父の病院を継いで海外にまで名医として知られている彼にこんなことがあったとは露知らなかった。私は「もしいじめをしていたのなら謝りたい」と手紙を出し、それから交友が復活し、彼の病院で痔の手術してもらった。もう一人の博覧強記の畏友山本正三によると、ぼんやり者の私は覚えていないが、昭和十八年ごろ四年生が五年生を傷つけ、刺された五年生が退学処分になったことがあったという。いじめられた生徒が

徒がいじめた上級生を刺した事件である(この事件を詳しくお知らせの方があつたら教えてください)。

つまり、静中では、復讐した生徒よりもその原因となったいじめをした方に厳しい指導が行われたというのである。これは「辱められたら死す」という武士の思想の延長の男性的な指導のように思う。

最近のいじめでの指導では、いじめた方(加害者)に甘いのではないかと思うことがある。加害者の人権も大切だが、二度と加害者にならないようにお灸をすえることも必要だと私は考える。私は三枝君に君の意見は過激すぎると返事を書いたが、一概に否定できないものがあると思っている。

皆さんはどう思いますか。

青葉が丘に思う

61期 相馬 孝

一昨年夏のある日、私は靖国神社内にある遊就館を訪れた。ここには太平洋戦争の戦死者の遺書や遺品が多く展示されている。一部部屋に足を踏み入れた時、一種異様な匂いに包まれた。暫くしてそれが陳列ケースに並べられた軍服や肌着から出る汗と脂の匂いのように思えた。半世紀を経てなお消えない、人間の執念のような匂い

であった。部屋の隅で若い女の子が顔をケースのガラスに押し付けて、目から涙が吹き零れていた。その子は涙を拭おうともせず、立ち尽くしていた。

去年は戦後五十年だった。ジャーナリズムは挙って様々な企画を立てて特集を組んだ。その一つ、NHKが全国から募集した「太平洋戦争・私の遺書・私の記録」には総計七九四編が寄せられた。これをもとに「時は流れず・七九四編が語る太平洋戦争」が放送され、内三三〇通の遺書は遺族の添書と共に本に纏められた。この本の編集に協力を求められた私は「戦後五十年」というものを手探りする思いで、まず靖国神社を訪れたのだった。

寄せられた遺書は戦犯、特攻、学徒兵と様々だが、中味は一律に死に向かい合って、残る肉親に別れを告げ、その幸せを案ずるといふ、今の人達には理解できないほどの崇高さに満ちたものだった。また添書は五十年間の遺族の悲しみ、苦しみが何とも生々しく記されていてどれも重たく、なかなか先へ読み進むことができなかった。清水市出身の石切山武治さんは十九年召集静岡連隊に入隊、サイ

パンで戦死した。娘さんは添書にこう記している。――五月九日夜連隊北門（再び帰れぬといわれた門）から三二〇余の将兵が出動した。母は私を連れ、静岡駅に向けて進む隊列を追って見送った。輸送船は南方洋上で沈没、十時間の漂流の末駆潜艇に救われた。

父はその時身に付けていたずぶ濡れの一枚の名刺に四行の走り書きをして乗組員に託したが、これが父の遺書となった。その中の一行は県立清水高女への入試を控えた私のことを心配し、母に「入学を頼む」と記されている。自分が死の淵に臨んでいながら、こんなに私の事を心配する親心に今も手を合せて感謝しています。――無論遺骨は帰らず、この名刺一枚が残されただけだという。

天竜市出身の大石人さんは中国で戦死。入隊前大阪毎日新聞静岡支局に勤めていたが、十七年三月三十一日結婚、四月一日豊橋で入隊。――私（妻出里子）は数えの二十歳、北安東に住んでいました。母は七月出征するらしいというので、母と豊橋にかけつけました。駅前広場で行進中の夫を見つけた時、小さな白い物が投げられました。母が咄嗟に走り出てそれを拾い上げたのがこの遺書です。

もうボロボロになりました。一人で読み返しては涙してあります。――遺書には「残る孤独の淋しさ、それが可哀相です。小生の帰りを元気に待って下さい」とあった。静岡市出身の武田一郎さんが残した遺書は前線で支給された「恩賜の煙草」の箱に書いたものだった。弟久雄さんによれば、――父を失い、幼い弟妹を抱えた農家の長男だった兄は、入隊数日前迄夜業して二百俵の米俵を編み、そのあと親戚に後事を託して出発した。中部第三部隊に入隊するため市公会堂前についた時、雪が降り出し、やがて雨にかわった。兄の肩の雪は氷のようになって積っていた。

わずか十日後、学生のブラスバンドに送られ、長蛇の四列縦隊となつて静岡駅のホームに消えていった。遺書では母や弟妹の将来を案じ、孝養を尽せなかったことを悔いていた。――母が子を奪われる悲しみはとも言葉で表わすことはできない。世田谷に住む方が寄せた添書の一節――母について悲しい思い出があります。母が亡くなる数年前のこと、親戚夫妻が訪れ珍しく話が戦死した兄のことに及びました。突然母が甥々と兄の遺書を語り始めたのです。始めから終わり迄、

体を左右にふりながら……呆気にとられていた周りの人は終った時皆涙を流しました。終戦後三十数年が経っていました。悲しい時、辛い時、母は繰返し語じていたに違いありません。――

若い特攻隊員の遺書には「散る桜 残る桜も 散る桜」（良寛辞世）の句が多く見られた。軍隊では「生きる」ことは絶対に教えない。――「如何に死ぬか」ばかりを教えた。二十前後の青年に、こんな老僧の枯れ切った心境の歌を押しつけて、無理に死を納得させようとしていた。本当にかわいそうなことだ。

ある特攻隊隊長の母に宛てた最後の便りの一節にこうあった。――自分の興奮に溺れてゐるやうな、そんな感情がなくなつてきて、やはり生きてゐるのは何にも増して換え難いものと思ふやうになつてきたのです。――略一いよいよ死なねばならぬ、さう思ふと戦にのぞむ湧き上がる心より、何か死に度くない気持の方が強かつたりするのです。――略――

た白布で抱き、銃を逆さにかけた儀仗兵に守られて、嬋々たるラッパの音に合わせ一歩ずつ進んだ。多分臨済寺で行われた部隊葬の時ではないかと思うのだが、帰還した遺骨があまりに多く、我々中学生まで狩り出されたのだった。葬列は本当に長く続いたが、その時私達は白木の箱がとて軽く、何も入っていないことを知ったのだった。

多くの反省の上に立った戦後五十年であったが、これで「戦後」という言葉は消えていくかも知れない。だがこれからの日本はどうなるのだろうか。――歴史に学ぼうという風潮の中で、戦前は皇国史観、戦後はマルキシズムが囃され、国民は右往左往した。それらは虚構に過ぎなかったのだが、あまりにも政治的であったため、多くの人生をねじ回し、残酷な犠牲を強いる結果となった。だがこの大きな犠牲を払って得た教訓は生かされているのだろうか。

一方今、私達の周りにはあまりにも醜いことが目につく。不合理な言い分、際限のない自己主張、破廉恥な行い、好きなことをして嫌なことはしない、真面目はだめで変った方がいい、本当はどうあ

れ建て前を振りかざして正義面をする等々。世の中一体どうなっているんだ。

去年夏所用があつて静岡へ行つた。城内の青葉や城門址は大分様子が変わっていたが、かつての姿は偲ぶことができた。浅間神社も臨濟寺も昔を残していたし、長谷通り、安東などの街並みにも落着いた雰囲気があった。よく渋谷に屯しているような茶髪に下げパンの惚けた若者にお目にかかることがなかった。どうやら「岳南健児」は健在のようだ。これなら日本の二十一世紀は大丈夫かも知れない。

花見、墓参、友人

67期 朝倉 勇

ずいぶん長い参道ね、という妻と浅間通りの商店街をゆつくり歩く。そういえばこの通り、こんなに長かったか。途中、山田長政の家などという史跡発見もあり、静岡祭りに出てきたらしい近郷の家族づれの間を縫うようにいく。浅間神社の桜は五分、いまを盛りの咲きぶりだ。四月六日土曜日、三十八年振りに訪ねた「浅間さん」である。裏の百段をのぼる。和服の妻は息を切らせる。見付かった古墳の整備に山は囲われ

ているが、桜はそんなことには頓着なく、あの桜色を一心に咲かせている。

「花見れば 問ひたきことの多かりき」

という旧句を思い出す。桜の花には、だれもが一種独特の思いをもつのではないか。いまこうして還暦を過ぎて、妻を案内しながら再訪しているふるさと。その神社の山に咲く桜の花。戦中・戦後の静岡。僕の胸には、問いにさえならないさまざまな思いが行き来するのだ。

そういえばこの句は、以前朝日俳壇で加藤楸邨、大野林火の両氏が共に選んでくれたのだった。両氏とも、いまは亡い。桜の花はそんなことも思い出させる。この花には、時間や歴史のようなものらしみ込んでいるようだ。

* * *

トヨペットクラウン・デラックスは安倍川を溯り、本流を渡って中河内川へと走っている。目指すのは柿島だ。柿島にある曹洞宗の寺、曹源寺を訪ねようというのである。車の中には同期の四人と僕の妻。運転は車のオーナー増田智一君、五万分之一の地図を見ながらナビゲートするのは六七期の名幹事梶原由三君、僕の隣は南米ベ

ルーからこのドライブに参加してくれた市川哲朗君だ。

梶原、市川、朝倉の三人は三年二組で同じ机に座っていた。昭和二十二年ころのことだ。まだ三菱重工の工場跡が仮校舎だった。あのころは一人一つの机なぞ望むべくもなく、細長い机に三人が並んで座っていた。市川君が突然、昆虫ごと湯原誠先生に叱られたときのことを思い出した。左様、三人そろって立たされたのだ。

増田君の運転はジェントルマンのそれである。くねくね曲る山道でも、警笛を鳴らさない。よい勘を働かせ、程よいところで対向車をパスさせる。人柄だなあと感心する。梶原君がおかしなことをいって車内を沸かせる。四人は、いつの間にか「中学生」に戻っているのだった。

さて柿島・曹源寺だが、そこには先祖代々の墓がある。今回の旅はその墓参にと妻と計画したのである。越前の朝倉家は朝倉義景の死をもって滅ぶが、その叔父に当たる朝倉右衛門大夫景高というものが、戦乱の越前を離れる。その子時景が安倍に落ちのびて、柿島朝倉家初代となる。系図によればそんな次第である。以来、僕の祖父で十二代。祖父まではこの谷あい

の小村に暮らしていたのだ。明治維新のとき勝海舟に惚れ込み、山林など資源のあらかたを買いでしまったという。

和尚に案内されて、寺から少し離れた山裾にくる。そこに歴代の墓石が並んでいる。すべての墓碑は院殿某の戒名が刻まれているが、苔むして判読は困難だ。かつての柿島の殿様たちも、わずかな石塊の示すところではない。

空は青い春の空。陽射しも明るく、のどかに春風も吹いている。中原中也の詩の一節なども浮かびそうなひとときだ。山裾に登れば、意外にも墓石の間から蜜蜂が一斉に飛び立ち、僕たちに襲いかかるうとする。しかし、突然の闯入者に驚いたのは蜜蜂の方であらう。かれらは、実は墓守となってくれているのかもしれない。線香の煙は蜜蜂には迷惑なことだ。だがしばらくは許してもらおう。

* * *

静岡市田町薩摩通りには人間臭い名所がある。飲み食い処「庄兵衛」だ。柿島を下った僕たちはこの名所にやってきた。この店にやがて光木徹君が台流のはずだ。この亭主は知る人も多い六七期の法月郁雄君である。かれは今年、静岡高校野球部創設一〇〇年

に向けて「百年史」の執筆を進めており、ほぼ完成の様子だ。その野球論には作家の村松友視も「法月さんは粋な話しの流れを面白がる骨太な人なのだ」と、一目をおいている。

野球論だけ面白くても、静岡野球部の歴史に詳しくても、出される料理がうまくなくては話にならない。ところが、「庄兵衛」の味は本物である。素材を選び、必要以上の調理をしない、という料理の真髓を剛毅に実行している。だから出されるものすべて納得なのだ。この日は、釜揚げしらす、初鯉の刺身、旬の筍、小じゃがいも、そして得意料理さくら海老のてんぷら、鯉のアラ煮、最後がトロのにぎりである。「こりゃなあ、おめつちのために特別に仕入れてきてやっただぞ」と亭主がいうだけあって六七期の五人は唸った。

光木君も、いまではすっかり飲めるほどに全快だ。めでたいことだ。ここに山川静夫君がいたら、超・盛会であつたらう。

その山川君とはほぼ二か月ごとに会える。三越劇場での「山川静夫名人劇場『芸・話・人』」があるからだ。この名人劇場は、かつてない優れたコンセプトと本物の芸によって光っている。コンセプ

トというわけは、歌舞伎、浄瑠璃、落語などの古典を、山川流の絶妙な解説で見せてくれるところにある。例えば、楽屋でしか見られない歌舞伎役者の化粧、着付けなどの段取りを目の前で見せてくれるとか、森進一が歌い養之助が演じるなどといった大胆な試みで観客を堪能させる。これは重要な文化のプレゼンターである。そして斬新かつ真のサービスであり、エンターテインメントなのだ。

長寿の秘けつ

68期 萩原多賀男

ある落語のマクラにこんなのがあったような気がします。大変不精な男がいて縦のものを横にするのもいや、まして夜中に起き、はばかりへ行くなんて真っ平。できることなら寝ながら小便したい。その結果「寝ていて小便してみたけれど、はたで見るほど楽じゃねえ」

38年間の新聞記者生活を終えて家内の実家がある静岡の掛川に引っ越しました。東京には十分不練はあるし、生活に困るということもありませんでした。家内の両親が健在で、地元には息子たちもいるものの「嫁に下の面倒をみてもらうのはご免」というのに娘で

あるウチのかみさんが同情、それに説得され掛川で老後を過ごすという気になったのです。「なあに相手は老人二人、こっちも老人の入り口二人。老人四人で暮らす新生活と思えばどうってことはない」と気楽に構えてきたのですが、どっこいこれが「はたで見るほど楽じゃねえ」のです。

ジイさんは96歳。このところちよっと酒量はおちたというものの一合五勺の晩酌をしたあげく、寝がけに七勺の盗み酒が日課で、おまけに80年間一度も二日酔いをしたことがないという妖怪みたいな年寄り。耳は遠いのですが、なんにでも興味を示し、新聞はすみからすみまで読んでいろいろ質問してくるのです。ところが私は五年前にのどの病気を患って声の出が悪いときているのです。耳が遠いのと、声の出が悪いのが会話しようというのですから容易なことじゃありません。しかも少し記憶力が減退していますから、言葉のやりとりをしている間に、なにを質問していたのか忘れてしまうのです。半分怒鳴り合いをしているようなものですから一会話終えるときタタタ。

バアさんは84歳。どちらかといえばバアさんの方が問題。男とい

うのは、あきらめも早いし、わりと順応性もあるのですが、女もここまでくると我ままでかたくな。ジイさんがものを言いつけ、気が短くなっているのでもう「まごまごするな、このクソババア」「だっただら自分でやりやいいじゃないか、クソジジイ」「おっ言ったな。世の中に鬼ババアてのはいるけど鬼ジジイ、てのは聞いたことがねえ」といったあんばい。

二人は駆け落ちで所帯を持ったのですが、亭主は和服の仕立て職人。大工や左官など、出かけて行って仕事をするのではなく、家にいて仕事をするいわゆる居職というやつです。30年間二人きりで全く変化のない生活を繰り返してきたのです。年老いて針の穴に糸を通すことができなくなると男はあきらめがつくようですが、女は頑固に二人の生活ペースを崩そうとはしません。私の家内のことも自分の娘なのか嫁なのか区別がつかなくなってしまうようです。布団のたたみ方、掃除の手順などありとあらゆることに気が入らないのです。これが嫁なら歯を食いしばってでも嫁いびりに耐えるでしょうが、相手は実の娘ですから一筋や二筋縄ではいきません。毎日が「荒野の決闘」のようなものです。

耳が遠い老人と声が出にくい義理の息子が怒鳴り合いの会話をしているわきで、母と娘がつかみかからんばかりの怒鳴り合いをしているのは、どこか狂っているような気がしてなりません。

なにしろジイさんは終戦直前、40歳代中は過ぎて丙種で陸軍に駆り立てられたものの、鉄砲がつかいで歩き回ることができずへたり込んでしまい、たった二日で軍隊を追いつかれた筋金入りのヘッポコ兵隊です。自分の嫁と娘の激しいやりとりにも動じないのは耳が遠いふりしてトボけているのかも知れません。二日間の兵役で身につけた「安全な延命策」。これが長寿の秘けつなのでしょう。

同期会を企画準備し、感じたこと

90期 荒井 千明

今年の初め、新年会を兼ねて関東地区同期会を行なった。会自体は成功裡に終わったとみていいと思う。その報告は既に同窓会本部ならびに同会報に済ませたので、関東地区の会報には同期会を準備するにあたって経験した、思わぬ障壁のいくつかを紹介したい。その一 同期生の居場所(現住所)の確認が取れなかったケース

今回は三年前の同期会総会に配られた名簿を軸にして、中学校の同窓や「静中・静高同窓会名簿」さらに友人同士の口コミを大いに利用して、最新情報を集めた。おかげで約百名の同期生が関東地区にいたことが確認できたが、旧住所の電話が不通で、しかも実家の連絡先が空欄(名簿に記載されていない)になっている例に関しては、連絡の取りようがなかった。

その二 該当する同期生の「周辺」には連絡がついたが、最終的に本人と話せなかったケース。該当者は約二十名。不思議なことである。その一例。電話をしたら、奥さんが出た。用件を話したら、連絡が入らないため後日、用件の確認を電話で行なった。しかし御本人からの連絡は、会当日になっても全く無し。またこれは別件だが、実家に連絡を取ったところ、こちらの素姓を事細かに聞かれた。挙げ句の果てに「本人とはもう何年か会っていないし、正月にも帰って来ない」との返事。「では今は、〇〇社にお勧めかどうか確認ができないのです」と聞けば「〇〇会社に勧めてはいるが、連絡しなくても結構です」という御答弁。結構と思っているのが御本人であればこちらは「不参加の

意志あり」と見做して見送ること
もできようが、身内の人から「結構」と言われても、いささか困る。素行調査をしているような妙な気分になって、砂を噛むような味気なさが残った。

その三 電話口での応答、そのほかについて

「ご都合やご意向は、如何でしょう」と聞いたところ、「出ません」の一言。「では又の機会にお願ひ致します」と言って電話を切った。もちろんこちらだって相手の顔を(多分)知らないし、相手もそうに違いない。ただ俺たちは同窓なんだぜ、そりゃ、つれないじゃないかと言おうと思っただけ、やめた。また或るご婦人曰く「往復はがきは来ないんでしょうか?」(…電話連絡だけなんですか?)(…信じられない! という声が聞こえてきそうな剣幕でした)…そんなんです、おっしゃりたいことはよく分かります。本当は文書での連絡が望ましいのでしようが、最新の名簿がここまで修正だらけですと、きつとかなりの数が返送されてくるのではないか、という危惧から電話作戦にでているという事情でして…そう説明させて頂いたケースもあるが、それさえ喋れなかったケースだってあった。

不況の声が聞かれて久しい。同
期会に出れば、少なからず仕事の
話になる。いい話ばかりではない。
それにまだまだむらつ気のある年
回り…その辺の事情が分からぬで
もない。ただ(関東地区)幹事と
しては、連絡先くらいは知ってお
きたいと思う。そろそろ同窓会に
出たいという人が将来現れたとし
ても、その人には連絡のしようが
ないからである。

我々は皆、年をとってゆく。年
を取れば若い時とは考え方や感じ
方が変わってくる。しかしそんな
ことは、容易に口にできぬものら
しい(仕事柄、高齢者の口からこ
うした告白を聞く機会がしばしば
あります)。そこまで幹事が気を
回す必要はない、そうも思う。整
理は煩雑だし、考えてみればそれ
とて、大したことでないような気
もする。結論は棚に上げて、もう
暫く「よろず請負人」でいようと
思っている。

●事務局へのご連絡は……

〒153 目黒区上目黒2-18-13
山中ビル タカラ歯科医院内
静中・静岡関東同窓会

兼科 名雄(87期)

電話〇三三七九二一三五八〇
(午後1時~6時)

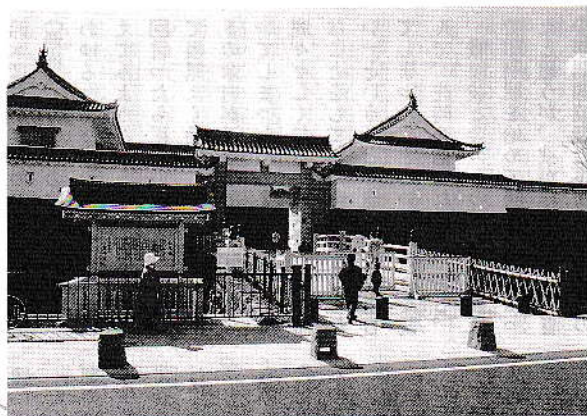
静岡だより

駿府城東御門が落成

三五〇年ぶりに再現

駿府城といえは、静岡の顔。かつては歩兵三十四連隊として年配者には馴染み深く、戦後の数年間
は、その兵舎が静岡(当時は静岡
城内高)の校舎として使われ、あ
る年代の人にとっては懐かしい場
所でもあります。

野球部が甲子園への猛練習を続



けたのも、このグラウンドでし
た。その後、駿府公園として静岡
市民の憩いの場として親しまれて
いますが、今度三五〇年ぶりに
『駿府城二ノ丸東御門』が再現し
ました。昔連隊時代には歩哨が立
ち、昭和二〇年代には「静岡城内
高校」の校名が掲げられた場所で
す。

この東御門は、最後の再建になっ
た江戸時代初期寛永一五年(一六
三八)の資料に基づいて再現され
たもので費用は約二〇億円といわ
れ、英文庫側の翼橋から連なる
白壁が、お堀の水に映える様子は
市の新しいシンボルとして
て親しまれそうです。

なおこの東御門はその
後「静岡市市民景観大
賞」の優秀賞に選ばれま
した。この大賞は優れた
都市景観を形成する建築
物などを市民の推薦から
選ぶもの。他には街路と
商店街整備で一新した
「呉六名店街」(呉服町二
丁目)が優秀賞に選ばれ
ました。来静の時には時
間を作ったの散策をお薦
めします。

(67期 光木 徹)
写真提供: 静岡新聞社

静岡・静岡定期戦(第38回)

四月二十九日、両校の生徒やO
B、野球ファン六千人が詰めかけ
伝統の一戦を楽しんだ。

静岡高 01000000001
静岡商 00201000003

静岡高は、主将で捕手・三番打者
の攻守の要である海野選手の負傷
がひびき、惜敗した。対戦成績は
静岡高の23勝15敗となり、これから
いよいよ夏本番への試練が始まる。
なお、OB戦は静岡高が打力で圧
倒し、13-1(五回打ち切り)で勝
った。

野球部創部百年

「記念部史」刊行!

B5判四五〇頁、予価一万円。
限定出版の予定で、予約申し込み
問い合わせ等は左記へ願ひます。

〒422 静岡市豊原町三六

栗田産業案内

静岡中野野球部OB会事務局
電話〇五四四二八二一〇六四四

第49回 江の島会のお知らせ

一、九月一日(日) 正午開会
二、江の島恵比寿旅館
一、連絡先 江の島会事務局

59期 奥沢徹(勝山塗装内)
(〇四五-301-15545)

追 悼

鈴木猛君を悼む

54期 庵原 悌次

鈴木猛君が昨年九月三十日に大腸癌で亡くなったので喪中につき新年の挨拶を欠礼するとの通知を暮に鈴木夫人より頂いた。

鈴木君とは静中時代、戦後と交際が比較的多かったので、彼を失ったことが残念でならず、二月の某日、松原のお宅を訪ね、仏前に香を手向けて故人を偲んだ。

鈴木君は東大卒業後、野砲三連隊々古屋に入隊、習志野学校、北支派遣軍を経て、終戦後、山東省青島より復員した。

終戦後は県岳、清水食品に就職したが、昭和二十三年からは役所勤めで、中央経済調査庁、厚生省そして一年間フルブライト留学で米国へ留学後、総理府に在職したが、その後は厚生省畑で社会保険大学、児童家庭局、厚生年金基金連合会、参事官を経て退職した。

以後、四十五年からは三保造船役員、群馬厚生年金会館々長、愛知会館々長、社会保険サービス社長等を歴任している。

ら麻雀、ゴルフ、語学と万能であった。

著書も職業柄、「医学経営の実際」「保健婦、助産婦、看護婦法の解説」等、厚生関係の著書が多かった。

御遺族は松原のお宅に和子夫人と、次男で東大文学部助教授の鈴木啓二氏が居られ、長男でNHKチーフプロデューサー鈴木誠一郎氏はNHKクリエイティブに出向中との由。

静中時代の彼の思い出はいくつかあるが、武道の時間はお互い柔道だったので、乱取りになると、乱暴で負けぬ気の強い彼とは取組み合いの喧嘩になり、ひどい目にあったことを覚えている。しかし日頃は至極穏やかで、田町の家へ遊びに行くと、よく気遣ってもてなしてくれた。

運動会の各部リレーで弁論部の彼が制服制帽に靴の正装で書物片手にビリでも懸命に走ったのを見た時は、何事にも真剣な彼の一面を垣間見る思いであった。

その反面、茶目気な一面も結構持ち合せていた。

昭和五十一年に鈴木春雄君が五四季会幹事の時、「思い出の記」を発案し私が印刷したが、その小冊子を読んでいたなら、私の文中で

鈴木猛君が生物の時間に伊藤先生

(通称ブラック)の口癖である『い

わゆる』を授業中に何回言うか数

えてみようということになり、五

回言ったら正という印を一つ書いて

根気よく勘定していたら、ノート

の余白が正の字でいっぱいになって

しまった。あまり多いので馬鹿々々しくなり、鈴木君が「こんな

ことをしていたら勉強にならない

い」ということで途中で投げ出して

しまった……というくだりを読んで、

戦後彼と会ったのは、私が東京で印刷屋を始めて間もない頃だった

と思うが、彼が総理府の中央青少年問題協議会事務局調査課長の

時、勤め先に彼を訪ねたら、静岡県

県庁で総務部長の職にあった永原

稔君が青少年育成について富士の

裾野に青年の家を作ることの相談

に來合せたので、久し振りに三人

で語り合ったことを覚えている。

彼は永原君とは法学部政治学科で

一緒であったからか、永原君の代

議士立候補の壮行会を芝プリンス

ホテルで催した時出席して彼を激励したものである。

「すえひろ」での関東同窓会総会

や関東五四季会の「新橋太洋」で

の集まりにも顔を見せたことなど

も友達付き合いのよい彼の一面を物

語っている。

昨年春、会報40号に載せる五四季の寄稿をお願いしたところ、健康状態が思わしくないからと断ってきたが、まさかそんなに悪いとは思っていなかったのだからこの次に頼もうと思っていた矢先のことで

もあり、本当に残念でならない。

今はただ、在天の霊よ安かれと祈るのみである。

合掌

見崎武君の思い出

55期 小澤 忠樹

年齢を重ねるにつれ戦没した若き日の友の面影が鮮やかに浮かんでくるのは、戦中派として致し方ないことであろうか。私の場合、サイパン島で二十二歳の青春を散らした見崎武君の思い出を綴る事で、運よく今日まで生き長らえている一人として、せめてもの哀悼の微意を表したい。

見崎君は生粋の焼津っ子で生家は丸川という屋号の養蠶業などを手広く経営する素封家であった。私は小学校六年の後半から焼津に移り住んだので、実は小学生時代の彼を知らない。中学に入ってから三年までは同級になることもなく、通学の往復に雑談を交わす程度の付き合いであった。所が私が旧制静高の受験勉強をするため

に臨済寺に程近い曉星館という下宿に移った頃、彼と、父君の転勤のため静岡に残ることになった中

田千束君と私の三人が同宿となった一年前後の時期があったが、これが短いながら彼の人生との貴重な接点となったのである。

私は当時専ら勉強の毎日であったが、彼は決してがりが勉強ではなくむしろそれを軽蔑するタイプであった。机にばかりかじりついていた私を付き合ひの悪い奴だと思っていたであろう、時折私の部屋を覗き込んで「小澤また勉強か、あまり勉強すると頭が禿げるぞ」とよくからかった(事実、私は後年その通りになってしまった)。

彼は中学生としては世事に長け人付き合いも良いので、交友範囲が広く、外見的には屈強な体格をしていたが、付き合ってみると意外にも繊細で、花や音楽、文学を愛する心優しい少年であった。当時殺風景な私の机上に花一輪が活けられていたとすれば、それは彼からの差し入れであった。花音痴の私がフリージアという花を覚えただのもこの頃であった。またレコードで「小さな喫茶店」(パレンシア)「ヘラ・パロマ」などの軽音楽と一緒に聞いた。私がこの年齢で声楽という趣味を持って



いられるのも、この時の記憶が影響している。「草枕」冒頭の「知に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ」のくだりは彼の最も愛誦する一節であった。〇〇一筋とか××一途というより、漱石ばりの風刺とユーモアに富んだ、どこかひょうひょうとした所のある、思えば一皮むけた中学生だった。

その彼は家業を継ぐのに学歴は不要として、結局東京商大専門部に進んだが、時運の嵐に逆らうことは出来ず、昭和十六年制定の在学年限短縮措置のおおききをもろに受けて予定より早く繰り上げ卒業

させられた後、一般の学徒兵より一足早く昭和十七年九月豊橋工兵連隊に入隊した。その頃、水産講習所に在学中であった同郷の親友中野伝兵衛君が彼の母上を伴って初年兵時代の彼に面会に行ったことを同君から聞いた。その一年半後彼の部隊は昭和十九年春内地を離れサイパン島に上陸して米軍を迎え撃ったが、同年七月の激戦で殆ど全滅した。戦死公報には七月十八日(守備隊島民玉碎の日)となっていたが、実はその十一日前の七月七日(所謂バンザイ突撃の日)に当たるに戦死したと後日

生還して真相を伝える人がある。この日が彼の命日となっている。彼の部隊が豊橋を出発するといふ日、知らせを受けた彼の妹が急速豊川から駆けつけたが部隊は既に兵舎を出発していた。漆黒の闇の中を駅に向かう隊列の中に運よく兄の姿を発見してしばらくはついて行っていたが、「ついてくるな」と叱られたのが最後の言葉となったという。

何故かかかる深夜の慌しい見送りとなったのか、それにはこないささつがあったらしい。いよいよ出発という日、彼は外出の時利用していた市内の某所を指定して、おそらく最後となるであろう面会に来るよう、当時豊川海軍工廠で勤労作業中の妹のいる寄宿寮宛に電報を打ったが、何故かその電報は現場で働いていた彼女の許へは届けられなかった。夕刻仕事を終えて帰寮した彼女を見て驚いた舎監は、自らの裁量ですぐ外出させてくれたが、時既に遅かったわけである。指定の場所待ち侘びた彼が心ならずも、目安となる行進中の自分の位置のみを伝言に残して帰隊した心中を思うと、戦時中のアクションとは言いやり切れない思いが残る。

△付記▽
見崎君の出征から一年後の昭和二十年五月、私の所属する戦車部隊は奇しくも同じ豊橋で編成を終え、同じように夜の市中を行進して駅に向かった。彼との違いは兵隊の階級のほかは、乗せられた軍用列車の行き先が、彼が輸送船団の待つ碇泊地であったのに対し、私の場合は(その輸送船がなかったがため)一路西下して、対戦車肉薄攻撃訓練が待ち受ける福岡県の演習地に向かったことである。

◆第12回叩高会ゴルフ会
7年12月1日(金)
箱根カントリー倶楽部
参加者: 26名
優勝: 仁科光司(77期)
2位: 宮代美佐子(ゲスト)
3位: 清水照彦(61期)

◆幹事会
12月12日(火)
新日本証券食堂
出席者: 38名
・会報40号の発送依頼
・連絡・打合わせほか

◆役員会
8年4月23日(火)
新日本証券食堂
出席者: 11名
・今後の運営・日程を協議。
6月に会報41号を会員に郵送し、7月12日の総会の出欠を伺うこととする。

その後の同窓会活動

(平成7年12月〜8年5月)

●関東同窓会が誕生して二十余年、はじめて総会・懇親会のお知らせを、この会報41号ですることになりました。会報の第一面をご覧いただきましたか。

七月十二日(金) 18時30分
親友と連絡し合って、ぜひ参加されるよう、幹事一同、待っています。

なお、同封はがきで出欠のご返事をすぐにお願ひいたします。

◎年会費の納入について……

平成八年度年会費(三千円)を同封の振込用紙でご納入のほどお願いいたします。

振込用紙は毎回「会報」に年会費の納入済・未納にかかわらず同封しておりますので、ご諒承ください。

平成七年度会費拠出者

平成7年11月1日～8年3月31日

(順不同・敬称略・寄付金を含む)

◎会報40号に掲載もれの方々もここに列記し、心からお詫び申しあげます。なお、八年度から年一回の掲載といたしますことをご諒承ください。

- 博、山中孝二、渡辺武男
58 天野国明、奥野広、末廣照男
須山静夫、世古眞臣、滝戸道夫、原木睦雄、望月恵一
59 青木静男、伊藤光雄、内田武男(6)、大串和夫、大塚恒、大村和夫、小澤武彦、小澤将男、川田昭、菅原操、寺尾宏一郎、加納久夫
60 池上晴行、逸見昭三、笠間達男、君島康弘、黒田武之助、野沢栄司、原田龍二、渡辺博和、芹沢博樹(4)、坪田昭三、仲野辰男、長瀬脩、萩原将弘、卷田英一、青木邦彦(4)
61 大石一輔、尾崎風伍、杉井益雄、高田桂造、吉川隆士、佐藤弘幸
62 岩本吉雄、益頭尚文、栗田行雄、村上喜代二、鈴木明郎、竹内豊、渡辺素夫、浅井幹夫、杉本哲、長谷川直和、塚本光彦、酒井謙次、吉井駿亮、佐野旭、狩野達彦、仲野実、望月康逸、馬場泰男、長島健、加藤満、時田勝博、名波倉四郎、田中耿、増田誠男
66 馬越峻、加藤昭、加藤博司、佐野栄一、渋谷文蔵、浜田裕志、原常勝、前田和彦、牧田善司、村松武司(6)
67 稲葉昌弘、大森恵吉、小倉牧夫、加藤友行、鎌野悦雄、児島英男、小杉謙一、杉田勝男、高山彰夫、滝川博、手塚重明、戸塚惣雄、鳥居滋夫、福原亨一、牧田仁男、増田安国、美濃一朗、向井久和、吉野亨、山川静夫(15)
68 大岡功忠(5)、神保尚司、鈴木国功(5)、鈴木昭夫、瀬口寿一郎、仁科将、松下司郎、望月節
69 植村守代、加藤喬志、神谷東洋、神谷貞子、狩野昌夫、下山茂、田川邦子、中村敏郎、原久弥、原英子、堀場千賀重、松島玲子
70 庵原英男(6)、石山博、市川三世史、遠藤和夫、大草敏郎、小嶋国彦、坂本康、佐々木政之、清水令一郎、白石通子、調子達郎、富田三樹、藤巻貞夫、堀西宥夫、松岡誠三郎、村上雅一、柳沢伯夫(5)、横山元二
71 浦田彰、加藤祐史、川上貫三、小池啓治、酒井力、実石欣哉(6)、関本光宏、玉井輝雄、富野寿、西野章、野沢弥寿、松井正年、三上裕一、矢部正和(6)
72 石川正明、大木通宏、桜井正之、清水雅彦、種茂雅之、内藤博次、野崎誠介、花田守弘、松木茂夫、丸山安彦、山田勝赤木政夫(4)、有光一郎、安藤顯男(4)、伊藤彰彦、池ヶ谷章(4)、石川八州夫(4)、石割浩司(4)、大石亮史(4)、大村春樹(4)、大村博(4)、奥島治、加藤元彦、君島武男(4)、小柳忠義(4)、小山武夫、後藤宏(5)、近藤守(4)、佐々木勝彦(4)、斎藤幸男(4)、柴山欽伍(4)、杉山親司、杉山光(4)、鈴木育、鈴木豊(4)、鈴木良明(4)、仲川信正(4)、中西英一(4)、西沢秀雄、羽山武、服部信司、松下勝朗(4)、松永烈、松永文夫(4)、的場潔、三浦英夫(4)、武藤至輝、望月篤(4)、望月公美(4)、山下省三、山中博司(4)、山梨由記(4)、山本一雄、山本健史、山本昌秀(4)、鷺巢蒸男、渡辺雅俊、後藤孝子、飯塚迪子(4)、遠山敦子(4)、青木俊一郎、石川征四郎、岡本修、小林篤夫(5)、塩坂雅司、塩津浩、鈴木智彦、富田彬道(5)、中川明久、西本昇平(5)、前田修宗像純司、望月智、山下茂支、山田修、今泉勝、大原順治、
73 鈴木千秋、鈴木聰男、外山眞佐樹、原崎幹雄、加藤甫、田中泰子、西田和子(5)
74 井出宏嗣、井上進、大嶽隆司、桑原英明、桑原伊玖子、田中佐知子、寺尾絢彦、中西恭二、西山肇、野々田昶、萩原茂春、藤原経史、松永竹生、岩崎匡利、近藤豊実、角谷治子、森下敏男
75 篠原興
76 池田哲郎(6)、伊藤哲治、国保能彦、富田駿介
77 石山健一、大隅多一郎、岡本天晴、小長井至幸、小林陽一、鈴木宏治、三浦位通、五十嵐誠
78 青野稔、大木伸昭、小林日出雄、多田佳忠、長島孝太郎、日向秀子、水野雄三、吉田和悦
80 柴田康弘、鈴木良彦、中村孝昭
81 大石高志
82 池野博、大隅恵子、小沢治夫、塩谷立、司馬立(5)、杉本浄田、成田恵理子、松永重雄、山田孝夫、杉山順一
83 池田純夫、北条正裕、安本敬久、嶋寛
84 浅羽伸人、安倍敏陽、石川嘉和、後藤正秀、中島京子(6)
57 天野喜久雄、大島隆夫、酒井

- 平岩正史、山本章子
88 塩沢潤
89 伊藤靖郎
90 青木佳子、荒井千明、荒井郁子、山梨孝子、織畑路代
91 中嶋隆夫
92 渡辺泰夫
93 大石修一、大塚全里子、鈴木育也、長島加代子、松野敦子
94 本杉暢輝
95 安倍昌宏、堂本修子、永江総宣
96 辻田淳子、渡辺一博
98 上原和美
99 渡辺範彦
100 望月訓子
101 久保大作
102 水元理恵
103 川上勤
104 児玉良介、松下高之、村松亮
105

「こえ」

この欄は「もう一つの総会」です。
気軽に筆を執り、送ってください。

45 下川 猛
此処まで幾山河を越えて来ましたがこれからの道程はどの位か？
道草を食いながら今日もなんとか歩きつづけています。すべてがのろいから仕方がないが、本年は七紀の年男となりました。

52 石野 浩一
会費納入の無い人には会報の発送はしなくてもよいのではないかとありますが、どうでしょうか？と申す小生も、七月に払込通知書を記入したまま郵便物の間に紛れ込ませ、遅れてしまったことをお詫びしなければなりません。

58 田中 誠一
同期の末広照男君の心遣いにより会報40号を手。静中43期の大先輩、小生(山口県下松市在住)に

会報はその構成といい、バランスといい、大変立派な出来具合でお世辞でなく感心しました。優秀な静中・静高の卒業生が如何に多く、関東にいらっしゃるというところでしうか。

59 寺尾宏一郎
東京の同窓会にたまには顔をだして、昔の友の顔をみたいと思っ

ていますが、病院勤めのため週日にはめけられず、残念です。
平成四年から、第二の職場の老人病院に元気で勤めております。

60 黒田武之助
関東支部会報誌いつも楽しく拝見しています。若い後輩の皆さんが夫々の分野で活躍されるよう祈念しております。

68 望月 節
東京に住んで四十年になりました。会社も自宅も日本橋三越へ歩ける距離です。本年もよろしく。

68 瀬口寿一郎
現在、全日本通訳案内業者連盟という語学技能者約四〇〇名からなる協同組合の理事長をつとめています。会員の約三分の二は才色兼備の女性で優秀な通訳翻訳者たちです。訪日外国人の観光旅行をはじめ各種の国際会議、商談、工場見学の際にお役にたつ人材を揃えています。もし、通訳等をご必要とする際には是非、私あてにお問い合わせをお願いいたします。

74 中西 恭二
静岡理工科大学の理事をしております。御支援のほどよろしく願ひ申し上げます。

74 寺尾 絢彦
非行少年を相手に三十数年、定年も近くなってきました。

74 藤原 經史
卒業後約四十年、若い人達の伸長を期待します。

77 三浦 位通
大石会長のご尽力で行なわれる年二回のゴルフコンペを、毎回来しみにしております。ゴルフと共に、大先輩達とのコミュニケーションがすばらしい。

69 下山 茂
「造園職」に就き生涯現役を目指す

77 大隅多一郎
現在ブラジル、リオ・デ・ジャネイロに単身赴任中です。(ご家族より)

79 中山 英子
つれあいともども卒業以来、東京に暮らしておりますが、一度も同窓会に出席したことがありません。次回には二人そろって出席したいと思ひます。

84 小沢 治夫
高校生のお子様のいらっしゃる同窓の皆様、お子様がお使いの「保健体育」の教科書、ひょっとしたら私の書いたものかも知れません。(筑波大学附属駒場高校教員)

94 松野 敦子
三番目に授った長女が食物アレルギーとぜんそく体質。そのおかげで料理と掃除をまめにするようになりました。

98 上原 和美
平成7年8月に双子の女兒を出産しました。ただいま育児に大奮闘中です。

●老若男女、多数の同窓生からのお便りを拝読。ご意見ご感想にますます会の運営を円滑化し、また会報もより充実したいものと存じます。今後ともご協力のほど切にお願い申し上げます。(編集子)

鈴木株式会社

取締役社長 鈴木 通弘 (76期)

清水市入船町11-1
TEL 0543(54)3015 (秘書課)

東京支店 〒105 東京都港区芝公園1-2-12
TEL 03 (3432) 7192

新日本証券

相談役 大石 巖 (53期)

専務取締役 海野 幸雄 (71期)

本店/〒101 東京都千代田区神田駿河台3-11

☎03(3219)1111

建築コンサルタント・設計施工業務
建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大 雄

取締役社長 奥野 孝 (53期)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階
TEL 03-3834-5331 (代表)

建築設計・監理

奥野建築設計事務所

取締役会長 奥野 孝 (53期)

取締役社長 奥野 進 (56期)

取締役副社長 奥野 広 (58期)

本社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル
Tel 03-3842-6831 (代表)

静岡事務所 静岡市安東2-8-14
Tel 054-246-9378

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩井 平一郎 (57期)

本社 静岡市国吉田3丁目1番1号

TEL 054(262)1111 (代)

東京 中央区京橋1-1-6越前屋ビル8F
TEL 03(3272)4651 (代)

自動車・電機部品の自動塗装及びシルクスクリーン印刷

勝山塗装工業所

代表取締役 奥澤 徹 (59期)

本社 横浜市瀬谷区橋戸3-25-6 〒246

Tel 045-301-5545

大和工場 大和市深見3706-1 〒242

Tel 0462-62-0340 FAX 0462-62-0343

東松山工場 東松山市大字新郷88-47 〒355

Tel 0493-24-2511 FAX 0493-24-2513

株式会社 富士越 株式会社 富士越化成

代表取締役 野澤 正憲 (64期)

東京都渋谷区東2-14-9

TEL (3409) 3342 (代)

TEL (3400) 9541 (代)

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック

熱 函 病 院

院長 小坂 博 (67期)

住所 熱海市春日町12-2

TEL 0557-83-3131

総合広告代理店

株式会社 アドプロ

代表取締役 朝比奈 正三 (67期)

東京都千代田区内神田3-4-5 岡崎ビル3階

TEL 03-3254-2171 (代表)

☎ 昼2時より夜11時まで診療 ☎

タカラ歯科診療所

代表 薬科 名雄 (87期)

東横線 中目黒下車徒歩5分

TEL 0120-376480